

三郎山論集6（上田女子短期大学 日本語教育研究会・国語研究倶楽部共同機関誌）1999.3

*エッセイ 私の見たニッポン

于 春 玲

日本に来て、自分の目で日本の社会を見て、いろいろと考えてみるのは、日本語を勉強する学生のあこがれとも言えるでしょう。今回の8ヵ月間の留学生活は、私にとって、またとない貴重な機会になりました。中国にいた時には、日本のことを本で読んだり、あるいは知り合いの日本人からもいろいろ聞きましたが、実際の生活をしてみると、思ったのとは違いがたくさんあります。

例えば、中国から小さい行火を持ってきましたが、1回も使いませんでした。電圧が違うからです。（中国では220Vですが、日本では100Vということを知りませんでした。）また、中国・東北地方の育ちの私にとって、地震も台風も温泉も初めての体験で、びっくりしました。

こうした自然環境の違いから生じた中日の考え方や、文化・習慣の違いは、当然なことでしょう。ただ重要なのは、違いを認識し、それに対する理解を深めることだと思います。その意味で、先日出席した長野市立篠ノ井西小学校の子供たちとの交流会は、印象的でした。特に10人ぐらいの中国帰国者の子供たちは、喜んで私たちと中国語で話をしました。子供たちの言葉は、まだ完全ではありませんし、日本で生活も大変かもしれませんが、先生方のとても親切で熱心な教育姿勢に強い感動を覚えました。

自分も国を離れて、初めての外国での生活で、先生方・大家さんからいろいろとお世話をさせていただいたり、学生の皆さんにも親切にいただきました。その都度、口には出せませんでした。本当に心から感謝しています。人への助けは、少しばかりの事でも、積み上げる事により、より美しい世界を作れるのではないかと思います。したがって、今盛んに行われている日本の様々なボランティア活動には、感動しました。それは、ただ時間があるからということではなく、人間の心が込められているからです。

最近のテレビ番組で、視聴率が30%を越えているという「電波少年」も、私たちの共感を呼び起こしています。中国語のわからない一人の日本人の若者と、日本語のわからない一人の中国人の若者とが、一緒に様々な困難を乗り越えて15ヵ国を旅していました。中国人の若者が知っている唯一の日本語「『朋友』は重要だ」（「朋友」は中国語で友達の意）

は、二人の旅の支えになっているように思えます。愛にはパスポートがありません。互いに学び、理解を深め、友情を結んでいくことは、どんなに素晴らしいことでしょう。

この8ヵ月間で、日本の美しい自然や素晴らしい景色を心ゆくまで楽しませていただきました。皆さんからも親切にいただきました。これらすべてのことは、私の心の中に深く刻み込まれ、美しい思い出となって、永遠に忘れる事ができないでしょう。帰国してからも、みなさんとの友情が永遠に続くように願っています。

(う しゅんれい／1998年度留学生／北京旅游学院日語系教師)



- 「中国の留学生との全校交流会」（長野市立篠ノ井西小学校主催）にて
～信州大学の留学生とともに～
前列：（左より）王長紅さん、于春玲さん、沈芙蓉さん、窪田かつよ先生

*エッセイ 私の見たニッポン

沈 英 蓉

上田に来て、あっという間に、もう8ヵ月間たちました。8ヵ月間の中で、一番印象に残ったことは、日本社会が教育を重視して、絶えず全力を尽くしているということです。

日本では、百年前に、義務教育がすでに普及していたということは、来日前に知っていました。今回の留学中、小学校の生徒たちとの交流活動を行なったときに、初めて日本の小学校を見学することができました。小学校の中には、体育館が二つあり、プールまでもあるということは全然考えてもみなかったことです。そして、楽器で私たちを歓迎する曲を演奏してくれた時に、私は「その楽器は、学校のものですか」と小学校の先生に尋ねました。「はい、全部、学校のものです。週に一回、吹奏楽クラブの活動があります」とのお答えをいただきました。このお答えを聞いて、施設が整ったすばらしい環境で勉強できる日本の子供は、本当に幸せだと思いました。今、中国では、家計を助けるために、学校に行けない子供たちは少なくないようで、字が読めない人もたくさんいます。

毎週、私たちは短大でパソコンの授業に出ています。中国でも、大都会の中学校では、パソコンの授業を行なうようになりました。でも、放課後は、日本の学校のように自由にパソコン教室を使えないのです。また、日本では、学校のほとんどのパソコンがインターネットとつながっていますから、非常に便利です。最近のニュースによると、郵政省は学校のインターネットの使用率を高めるために、通信料金を通常よりも安くするそうです。これからの社会は、情報化が進むでしょうから、二一世紀の人材を育てるために、全力を挙げている日本政府の姿が感じられます。

このほか、日本の大都会では、毎週いろいろな展覧会をやっているようです。世界各地の文化財・芸術品が、たくさんの美術館・博物館で次々と展示され、詳しい説明もついています。愛好者にとっては、外国に行かなくても、世界のさまざまな文化に接する非常にいいチャンスが与えられています。展覧会の入場料もそれほど高くないので、行きたい人は殆ど行けます。大手企業もいろいろな美術館とか、コンサートホールを作って、外国からすばらしい作品を購入したり、一流楽団を招いたりして、文化活動に活躍しています。そのようなことを通じて、大衆文化の質を高めることができます。中国では、日本のよう

に財団法人が文化事業を助成することは、あまりありません。殆どが政府の出資となるので、展覧会・コンサート等の数は、ずっと少ないです。

国民の基礎教育を重視しなければ、国の経済も速いスピードで発展できないということをみんな知っています。中国は、改革開放以後に経済がだんだん発展してきていますが、経済発展と共に、利益を得た財団法人は、国と一緒に少しずつ教育・文化事業を支援し、国民の素質を高めるように努力すれば、国家・国民・企業にとって、有意義なことだと思います。そして、中国は、日本のように教育・文化に力を入れることを通じて、人々の生活も豊かになれると信じています。

(しん えいよう／1998年度留学生／北京市国際交流服務中心通訳)



●長野市立篠ノ井西小学校の子どもたちと沈英蓉さん